
月が鏡になればよい

麻戸 槲來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月が鏡になればよい

【Nコード】

N4779V

【作者名】

麻戸 槲來

【あらすじ】

愛さなければよかった…こんなに身勝手なあなたの事なんて。遠距離恋愛の末、やっと会えると思ったのに、あなたの口から出てきたのは、別れのことばだった。——望んでこんなに好きになった訳ではないのに、あなたは私を置いて行くのね。

新しく「彼がいなくなった日」の出来事を一話掲載しましたので、よければお付き合いください。

逢わぬ昔にして返せ（前書き）

都々逸「遠くはなれて会いたい時は月が鏡になればよい」（一休禅師）より

逢わぬ昔にして返せ

愛さなければよかった…。

こんなに身勝手なあなたの事なんて。

遠距離恋愛だということも辛いのに、お互いに忙しくて。前回だつて久しぶりに

会えたと思ったら、たったの一日で仕事に戻るし。

ねえ、分かつてる？

もう、一年以上まともに会っていないんだよ？

私だって言いたくないのに「私と仕事、どっちが大事なの？」なんて、

月並みなことばが浮かんでしまう。

たとえ私との時間をつくるために忙しいのだとしても、やっぱりどうしても

淋しいよ。

こんな状態でも、また再び、あなたに逢えると信じているから頑張つて

居られるのに…。

無理して待っている間に、どうして笑っているのか分からなくなりそうよ。

——だって頬が引きつるのが分かるのよ。
人がいなくなつた途端に、顔から表情が消えるのよ。

それでも、みんなに心配をかけさせたと知ったら、あなたは怒るの
でしょう？

だから私は、笑うのよ。

本当にひどい人だと思うの。

こんなに待たせて

こんなに想わせて

こんなにも好きにさせたくせに

久しぶりに会えた私を見た途端、

俺の事は忘れろ、なんてどの口が言つのかしら

「ふざけるな！」って、こういう時に言つのよね。

ほら、今すぐ戻ってきて抱きしめてくれたら

許してやらない事もないから

この涙の理由は聞かないで…。

そつちの世界でも、

今日出せなかつた婚姻届は有効ですか？

（あなたの家族に、なりたかった…。）

逢わぬ昔にして返せ（後書き）

いとも簡単に、あなたを奪った事故は憎くないけれど。
たやすく私を手放した…

あなたが、憎くて憎くてたまらない。

都々逸「切れてくれなら切れてもやろう 逢わぬ昔にして返せ」
（詠み人しらず）

次は、男性目線です。

人目しので見る写真

『本当に、馬鹿で真面目でお人よしで、どうしようもない人だったけど

私にとつたら、愛しくてしょうがなかったんですよ』

そう微笑んだ人の顔が、まぶたに焼き付いて消えなかった。

?
?
?
?
?
?
?

「もう本当にさあゝ、美人で優しくていい女なんだよ」

なんで俺は、縁もゆかりもないこんな人間の話を選々と聞かされなければ
いけないのだろう。

昨日、交差点でたまたま目があつた幽霊と目を合わせてしまったのが、悪いのは

分かっているが、どうしても諦めきれない。

幽霊を見るのなんていつもの事なのだが、つい珍しい姿に目を止めてしまったのだ。

それから、この男にずっと惚気を聞かされていたら、嫌にもなるだろう。

「でさ、申し訳ないんだけど…。

明日、赤い目をした美人に会ったら、怒鳴られるのを覚悟でいつてやってくれよ。

あんたを捕まえ損ねた男は、この世でいちばんどこるかあの世でさえも一番幸せだったんだって。

だからもう、そんなに重いからだ引き摺って、墓なんかに行くなよって。

大体あんたに惚れたその男は、いつまでも未練たらしく、あんたの傍にいるから意味ねーってさ」

——そうまでしてくれる彼女がいとしくて愛しくて、

でも、今すぐ抱きしめられないのが、もどかしくて堪らないんだよ。

これまで、能天気な惚気ていた男とは思えないほど、こいつは切なげにつぶやいた。

『なんでお前の恋人に俺が会いに行かなきゃいけないんだと』文句

を言う事が

出来なかった。今まで、幽霊の願いなんて聞いていたらきりがないと、見て見ぬふりをするのが当たり前だったのに…。

「な？頼むよ。

あいつ体調が悪くても、子どものようす知らせに来るんだよ」

…ただでさえ昨日見た、幸せそうないつと花を持った妊婦さんの姿を、忘れられないのに、そんな風に言われて断れるわけがないだろう。

「…ッわかったよ！明日でいいんだな？」

「ッお！行ってくれるのか、ありがとな。ただし…」

？

？

？

？

？

？

？

？

「——それから、俺の子供をよろしく頼む。との事でした」

話し終わると、彼女はゆつくりと瞳を開いた。

『貴方の死んだ恋人が、伝えたい事があるそうです』何ともひねりのない、

怪しげなことを言う俺の話を、彼女は最後まで静かに聞いてくれた。

「そんな怪しげな言葉、詐欺師だつて言わないと」彼女の隣に座っている幽霊は

言うが、疑っていたのは最初だけで、考えていたよりすんなり彼女は受け入れてくれた。

実際、俺自身もそんな言葉を信じて大丈夫なのかと思ったが、若干なら彼女も

幽霊の気配を感じる事が出来るらしい。

どこか恋人と一緒にいる気がしたのだという。

あいつの言葉を伝え終わり、俺は彼女と別れた。

彼女は昨日すれ違った時とは違い、まるで花が咲くような笑顔を見せてくれた。

『行ってくれるのか、ありがとな。ただし、俺の彼女に惚れるなよ』

笑顔見た瞬間、思わずあいつに言われた言葉が頭をよぎった。

——けれど、どんなに頑張ろうと俺の気持ちが報われる事はないだろうな…。

あんなに幸せそうな、愛しそうな顔をして、あいつを貶^{けな}していた彼女
の心を
奪える自信が俺にはなかった。

きつとあいつに似た子供と一緒に、彼女はこれから歩んでいくのだ
ろう。

人目しので見る写真（後書き）

「忘れると」言った舌の根も乾かぬうちに、君の傍に張り付いて他の男を牽制する馬鹿な俺を許してくれる君が愛しくて恋しくてしょうがない

都々逸「口でけなして心でほめて 人目しので見る写真」（詠み人知らず）

『その後』の内容はタイトルとはイメージが違うと思いますので、ぜひ見てみてください。あれも都々逸なんですが、何気に一番気に入っています。

——私は、作品内で主人公に心変わりさせませんよ…。
この台詞で、分かってもらえますか？

お約束だけ出来ぬ人（前書き）

一応、この話を投稿したのは、「その後」の後になります。
彼女目線です。

お約束だけ出来ぬ人

——まだ、体があなたを覚えている

目が覚めて起き上がると、夢の中でも泣いていた事に気づく。
視界がぼやけているわけではなくて、頬を涙が流れていったのを感じたのだ。

昨日さんざん泣いたというのに、まだ足りなかったらしい。
何がそんなに悲しかったのだろうか？寝るまえの記憶が曖昧で、頬が痛みだすほど
泣いた理由を思い出せないでいた。

それにしても、どうして私はこんな真っ白い部屋で寝かされているのだろうか？

見るからに、ここは病院の一室のようだが…。

確か、昨日は彼の両親から連絡が来て、病院に向かった。

そう、今日は丸一日休みを取れたと誇らしげに言ってきたくせに、約束を破って

彼は仕事に出かけて言ったのだ。それに拗ねた私は不貞寝して…。

いい訳をさせて
もらうと、前日の夜にさんざん彼が無茶をしてくれたせいで、寝た
のは夜明け近く
になり、眠くて仕方がなかったのだ。

きつと何時もと同じで、申し訳なさそうに甘い物でも買ってくるだ
ろうと考えていた
から、私はそれまで寝ているつもりだった。
けれど、いつまでたっても彼は帰って来ず、私を起こしたのは聞き
なれた彼の声では
なく、電話のけたたましい音だった――。

嗚呼、そうだ。

「彼は死んだと」みんなが言うのだ。

そんな冗談を言って何が楽しいのか分からなかったけれど、私は彼
に会うために目が
覚めてまたすぐ病院に急いだ。

本当は、昨日の時点で彼を連れて帰ろうとしたのに、腕を引っ張ろ
うとする私をみんな
が止めるのだ。早くしないと、市役所が締まって結婚届けを出せな
くなってしまう
のに…あまりにもつらそうな顔でみんなが止めるから、私は届けを
出すのを引き延ばす
ことにした。

その上、昨日は彼を連れて帰るところか「一度休みなさいと」言つて、彼の両親に私だけ家に帰されてしまった。しかし、さすがに今日には届けを出したい。

じゃないと、式などの関係で、もっと先送りする事になるだろう。本当は私一人で出してくると言つたのに、「一生の思い出なのだから、一緒に行きたいと」忙しくせに彼が駄々をこねたからこんな事になっているんだ。

この為に、せっかく彼も無理して休みをもぎ取つたのに、それが引き延ばされるのは耐えられない。

—— そう思つて病院に着いた途端、彼を探したけれど、みんな落ち着けと言つてなかなか彼に会わそうとしないのだ。

まるで私だけ仲間外れにされたようで、とても不愉快だった。どうして自分の婚約者に会つのに、こんなにもいろいろ言われなければいけないのだろう。

大体、昨日はおかしな夢を見たから彼に一番に聞かせようと朝から考えていたのだ。彼が事故にあつて、「俺の事を忘れて、しあわせになれと」似合わないかつこいい

セリフを言う夢を見た。あんなにもリアルな夢を見たのは初めてで、早く彼に話したくてしょうがなかった。

…そうだ、思い出した。

それなのに、病院でわたしを迎えたのは冷たく何も話さない彼だったんだ。

——アレは、ほんとのことなの？

そう思い、彼の冷たい体に触れた途端、私は病院で倒れてしまったのだ。

まだ、彼が死んだという事を認められたわけではないのに、涙だけは出るのだから

不思議だ。気分的には、今にもひよっこり扉を開けて現れるのではないかと感じているのに…。

彼が大つきらいな、薬品くさい病院に寝かされているところを見て、も実感なんて湧かなかった。むしろ、39度近く熱が上がっても「病院になんて行きたくない」と言っていた

のに、よく黙って寝ているなあと、はじめ見たときは感心したのだ。

——けれど、流石に二度も冷たくなった彼を見ればわかってしまった。

いまだに、昨日まで一緒だった彼の体温を思い出せるけど。裸になれば、私の体には彼の付けた痕が残っているだろうけど。

彼は死んでしまったのだ。

お約束だけ出来ぬ人（後書き）

必死に目を閉じ、耳を塞いでみたけれど…

みんなが正論を言って苦しめるから

とうとう私は

貴方の不在を認めてしまった

都々逸「小唄どいつ なんでもできて お約束だけ 出来ぬ人」

（詠み人知らず）より

諦めましたよ

俺の奥さんは、最近独り言が多くなった。

さすがに、外では「やめておけと」思うのだが、まだそれを伝えた事はない。

彼女はずいぶん成長した息子を両親に預け、近頃仕事に復帰した。

幸い、育児休暇なども充実している職場だったため、復帰自体には別段支障は

なかったらしいのだが、やはり子育てとの両立は大変らしく独り言のほとんどが

俺に対する愚痴だ。

それは俺の両親と会う時にも発揮され、俺の母親と仲良くやってくるのは

ありがたいが、話のネタはもっぱら俺に対する愚痴なのは頂けない。特に俺の母親など「親不幸な息子に貴女のような素敵な人はもったいない」と、

まるで彼女の親を代弁するようなことを平気で口にするのだからたまったもの

ではない。

だが、俺としても親不幸な事をしてしまったと自覚している分、黙って聞いている

他ないのは情けないところだ。

息子も1歳になり、ずいぶんしっかりしてきた。

彼女が息子の名前を「隆司^{りゅうじ}」にしたと言ってきた時は、俺の名前と

同じ漢字を使うなんて、可愛い事をしてくれるじゃねーかと喜んだものだが、
すぐさま、漢字が気に入っただけだと言われたのには少しへこんだ。

——いくら傍で息子の成長や妻の生活を見守っていると言っても、俺には二人を抱き

しめてやる事は出来ない。

あいつは幽霊おれの存在をうつすら感じるだけで、どこにいてどんな顔を俺がしているか
すら分かっていないのだ。

こんな事なら、せめて籍だけでももつと早くに入れておけばよかったと後悔したが、

それさえもあいつを縛る事にしかない気がする。

俺が死んだ当日にあいつと籍を入れようとしていたため、あいつは正式には俺の

妻ではない。だから、あんなにもしょっちゅう俺の両親に子どもの顔を見せに

行く義理もないし、いい奴を見つけて新しい人生を歩むことだって本当は出来る筈だ。

…けれど、俺が死んだあと妊娠が発覚したあいつは、初めて子供が出来たという事実

に怯えることなく、一人で育てていくと俺の仏壇の前で誓ってくれた。この時ほど、あいつの強さと優しさを実感した事はないかもしれない。

い。
それと同時に、あいつの脆さを垣間見ることになった。妊娠が分か

った後、彼女は自分の
両親とだいぶもめており、「どうしてもこの子を一人で育てたいか
ら協力してくれと」
電話しながら泣いていた。

何故、俺が幸せにするはずだった彼女の姿を傍で見ている事しか出
来ないのだろう…。
こんなにも頑張っている姿を見ると、さすがに申し訳なくて涙が出
た。

以前に、俺の声を聞ける人間に会った事がある。

その人間に頼み、一言言わなければいけない『何もそこまで無理す
る事はないんだ』

と言うことを伝えてもらった事があった。

だが、きっと彼女は死ぬ直前に「俺のことは忘れてくれと」言った
ことやその言葉が

ただの強がりであり、本心ではない事を知っていたのだろう…。

彼に会ってもらったその日の夜中に、「私が子どもの父親役も母親
役もやってみせる

から安心しろと」言って一人泣きながら笑っていたのには、彼女の
幸せだけを願えない

自分が情けなくしょうがなかった。

…お前は「泣くのはきらいだと」いつも笑っていたのに。

俺の事でそんな顔をしてくれるなんて、想ってくれているなんて

知らなかった。

思えば、明るいと言われていた俺のマイナス面を理解し、支えてくれたのは彼女だけだった。そんな彼女だから、俺の格好つけた虚勢などすべてお見通しだったのだろう。

——もう、自分に正直になってもいいだろうか？

四十五日が過ぎて、成仏しようとした俺を引き留めた心残りは、子どもの事だった。

せつかく生まれた隆司が、体が小さくこちら側の世界に来ようとしたのを阻止した後は、

もう少し隆司が大きくなるまで見守りたいと考えた。

けれど、どれだけ理由付けをしても、結局俺が家族のもとを離れたくないのだ。

ベビーベッドで一人遊んでいる隆司をみつめ、その想いはより強くなった気がする。

あと少し、あと少しだけ…。

「俺にお前の父親面させてくれるか？」

そう問いかけた俺に、目の見えないはずの隆司が俺を見つめ、笑いかけてくれた。

諦めましたよ（後書き）

ずうずうしくも、その瞬間に

確かに俺の子どもなんだと実感する事が出来て…涙が出た

都々逸「諦めましたよ、どう諦めた 諦めきれぬと諦めた」（都々
一坊房歌）より

お前の母さんも、お前の事も

愛おしくて、抱きしめたくてたまらないよ

多分これで作者自身、満足できたと思います。

この家族はずっとこれから生きて行き、幾らでも未来は続いているので、これで終わりと区切るのは私には難しいです…。

もしかしたら、またこの家族の一場面が浮かび続きを書いてしまうかもしれませんが、その時はお許しください。

この作品にお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779v/>

月が鏡になればよい

2011年11月13日09時28分発行